

[17\_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :  
17(4)

<https://doi.org/10.15017/17984>

---

出版情報 : 図書館情報. 17 (4), pp.39-64, 1982-01-25. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :

九州大学附属図書館報

# 図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 17, No. 4(1981, 10~12)

## 中国・韓国における医学図書館訪問記

山元寅男

今年になって、中国と韓国を訪問する機会があった。その折に、2、3の大学の医学図書館を、講演の間のわずかの時間に、急ぎ足で駆け巡った。当初、医学図書館を訪れる予定は全くスケジュールに組まれていなかったために、無理に当局にお願いして、このような見学となったのである。したがって、ここに記す印象記も、全く、個人的な印象記であり、公式の資料を入手してこれに基いての記録でもないことをお断りしておく。

先ずはじめは、中国東北部にある瀋陽市の中国医科大学（旧満洲医科大学）附属図書館を見学した。この図書館は、私が講演を行った講堂に隣接していたため、講演終了後直ちに案内して貰うことができた。日本時代に建てられたそのままのことであった。入口は比較的狭く、日本の古い医学図書館を思わせるものであった。受付カウンターも見当らず、事務室が一角にあって、中に2~3名の職員が執務していた。主任の案内で、はじめ雑誌コーナーを見学した。ここで、我が福岡医学雑誌をはじめ、日本の医学雑誌が非常に多数、整然と配架されていたのに驚いた。北京でも同様であったが、「日医コーナー」が設けてあった。さらに、「欧医コーナー」では、我々に馴染み深い外国雑誌が分類配架されており、その古いものには、満洲医科大学……教室のゴム印があった。案内を頂いた主任の方に、図書館概要のパンフレットを呉れるよう頼んだけれども、パンフレットを入手できず、したがって、蔵書数、購読雑誌数、利用度などの詳細は知ることができなかった。二階は、単行本の書架兼閲覧室で、ここも日文コーナー、欧文コーナーなどに分類配架されており、古い日本の書籍のみならず、戦後刊行された単行本も数多く配架されていた。要するに、日本医学に対する関心の深さが強く感じられ、また、「日医紹介」という日本の学術論文の抄録雑誌が中華医学会遼寧省分会の手で発行されていることから、日本の医学情報の収集にいかにも熱心であるかが察せられた。図書館の入館は自由で、開架式閲覧方式をとっているため、受付カウンターなど見当たらないのもうなづけた。まだ、コンピューターの図書館への導入は行われていない。私が訪れた折には、閲覧者もちらほら程度で、あまり活況は呈していなかった。

次に、北京にある中国医学科学院附属図書館を見学したのであるが、ここでは館員の中で、日本語の達者な人を案内につけて貰ったので、館内の様子も比較的つかむことができた。すなわち、図書館は、中国医学科学院基礎医学研究所、首都医科大学、同附属病院など同じブロックに建てられている。この図書館は1926年、ロックフェラー財団の寄附で建設されたもので、かの有名な北京図書館と同じスタイルの瓦屋根葺き鉄筋コンクリート3階建ての中国風の図書館である。表玄関から中に入ると、机に付いた女性の司書が入口のホールにいて、図書館での貸出返却業務にたずさわっているようであった。

日本語を立派に話す案内の司書の話によれば、この医学図書館での蔵書数は23万冊、年間6000冊を購入しているとのことであった。また、雑誌の総種は1700種とかなり多く、このうち、日本誌288種、中医関係雑誌は約300種とのことであった。

玄関ホールから左に折れると、新着雑誌コーナーがあり、壁面は全てビジョンボックスで埋められ、新

着雑誌が並べられていた。部屋の中央には閲覧机があり、2～3人の研究者が雑誌を読んでいた。図書館は中央の廊下をはさんで左右に小さな部屋がいくつも並んでおり、各部屋の壁面は全て書架で埋められ、雑誌が製本されて収納されていた。ここでも日医コーナー、中医コーナー、欧医コーナー等が部屋ごとに区別されていた。各室は中央に閲覧机があり、研究者はその部屋の書籍雑誌をこの机で閲覧するようになっていた。単行本は最上階の同様の部屋に収納されており、日医コーナーで自分の著書を見つけたときはやはり胸がおどった。このコーナーでも3～4人の閲覧者があり、日本医学への関心の高さを知ることができた。内部の見学を終えたところで、事務長(?)さんがサインをしてくれとのこと、漢字でサインしたら、上手だと賞められた。

この図書館も開架式で、入館は自由であった。入口ホールの司書は、貸出、返却業務の他に、参考調査の仕事も行っているようで、目録カードもこの人の近くに置いてあった。職員数はさ程多くなく、コンピューターの導入計画はあるが、まだ使っていないとのことであった。図書の紛失などはないという話を聞いた。

韓国では、全南大学医科大学とソウル国立大学医科大学を訪れる機会があった。前者は現在研究棟の新営中で、医学図書館は仮りの建物で開館中とのことであった。キャンパスの拡張、新営の最中のため、内部についての資料も得られなかった。外国雑誌は約170種購入しているとのことであったが、キャンパスの整備が終ると共に、図書館の充実が計られる予定と聞いた。

次に、ソウル国立大学医学図書館を訪れた。これは、大韓民国解剖学会総会行事の1つで、ソウル国立大学医科大学見学の途中に案内して頂いた。本館(旧京城帝国大学医学部本館)の横に接して扇形の立派な落付いた二階建図書館で、扇の要のところに入口がある。入口を入ると、カウンターがあるが、当日は土曜日の午後とあって職員は見当らず、アルバイト学生らしい2、3人が職務についていた。カウンターを通り、内部に入ると、書架が扇の骨の様に配列され、製本された雑誌と単行本が整理配架されていた。ここでも雑誌の古いものには、京城帝国大学医学部……教室のゴム印が押しであり、城大時代からの雑誌、書籍が良く保存されていた。書架は、各階の半分を占めており、扇の先端部は全て閲覧机で占められている。明るい窓に接した静かな閲覧机では、土曜日の午後にもかかわらず、多数の学生が熱心に本を開いて読み入っていた。

この図書館も開架式で、貸出返却業務はカウンターで行われていた。ここでも、図書館の概要を知ることではできなかったが、外国雑誌は現在約700種とっているとのことであった。図書館業務の電算化は未だ行われていなかった。

以上、中国と韓国における医学図書館の2、3をかいま見ただけでその実情を詳しくお伝えできないのは残念であるが、両国の医学図書館の形態は我が九大医学分館のそれと大差はないように思われた。ただ、韓国ソウル国立大学の医学図書館は、学習図書館として十分機能していると思われた。図書館職員は日本に比べて少いようであるが、いずれの館でも図書館の発展への意欲は十分感じられた。(医学分館長)

## 本学所蔵の伊勢物語関係書について

田 坂 憲 二

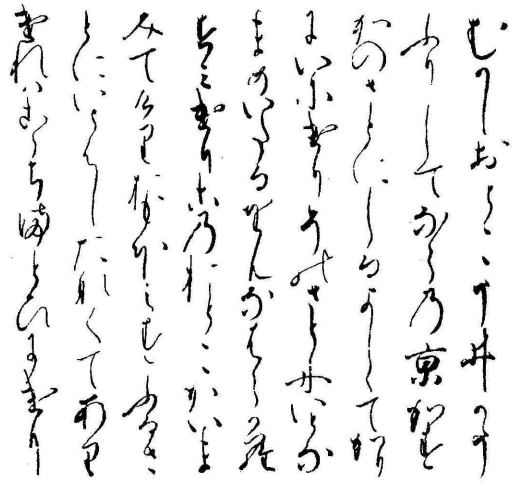
本学中央図書館及び文学部には、伊勢物語とその注釈書が、写本・板本あわせて約百部程蔵されており、貴重な資料も少なくないので以下それらを紹介したい。

本学所蔵の伊勢物語関係書の大部分は、中央図書館の細川文庫・音無文庫・支子文庫の旧蔵書中にあり、宇土細川家・理学博士寺尾寿氏・本学名誉教授田村専一郎氏という有数のコレクターの手によって蒐集されたものがまとまっていることがその特色である。従って各文庫にはそれぞれの特徴があるので、文庫別に代表的なものを数点ずつあげることにしてしよう。

細川文庫の伊勢物語は、宇土細川家の旧蔵書に相応しく、本文或いは外題の筆者を著名な公卿・歌人とするものが多い。同文庫中の白眉は、古筆了泉・了佐・了栄・了仲によって藤原為家(1198～1275、定家

男)筆と極められている柀型本である。(中本一冊、写真は同本の巻頭部分)鎌倉中末期写の古写本であり、本学所蔵の和書の中でも、重要文化財の勝命本大和物語などと共に、書写年代の古さでは屈指のものである。内容的にも極めて注目すべき存在であり、根源本(定家本伊勢物語は、天福本・武田本・根源本に三大別される)系統中の最善本の一とされるものである。早く古典文庫より写真版で複製が刊行され、学会でも広く利用されている。次に、在九州国文資料影印叢書(第一期)に収められた、三条西実隆(1455~1537)筆天福本伊勢物語がある。列帖装の中本で、金茶地に水辺草花模様金砂子散らしの表紙に朱の題簽を付す典雅な本である。実隆自身の識語は持たないものの、畠山牛庵・古筆了意の極め札が添えられており、筆跡から見ても明らかに実隆の筆になるものである。実隆は、蜷川親元より定家自筆の天福本を借覧し、その忠実な転写本を数部作成した。古典大系本などの底本として著名な学習院大学本や当該本はその内の一本である。又、天正17年の細川幽斎の識語を持つ武田本伊勢物語(大本一冊、外題は中院通勝筆とされる)もあるが、これは天正17年本ではなく、その忠実な転写本である。他に、伝四辻公韶筆本(室町中期写)、伝中院通純筆本(近世初期写)などがある。

音無文庫本の伊勢物語関係書の特色は、注釈書が中心であるということにある。古今・伊勢・源氏と並び称せられてきたように、古来より伊勢物語は多くの歌人・学者によって研究が行われ、注釈書も次々と生み出されてきた。しかし、それらの注釈書の殆んどは、一部の著名なものを除いては活字未翻刻であり、写本板本も稀観なものが多いが、音無文庫には約四十種の注釈書が蒐集されている。例えば、十七世紀後半に相次いで板行された「伊勢物語集注」(一華堂切臨)「同抒海」(浅井了意)「同初冠」(加藤盤斎)「同拾穂抄」(北村季吟)「同秘訣抄」(高田宗賢)「同増選抄」(著者未詳)なども全て揃っているし、写本として比較的珍しいものには「伊勢物語忍摺抄」などがある。同文庫蔵書中の興味深い存在は、後水尾院関係の資料である。後水尾院は近世初期堂上文壇の中心として様々な文学活動を行い、伊勢物語に関しても「伊勢物語御抄」と呼ばれる注釈書を著わした外に、数度に亘って堂上文人を集めて自ら講釈を行っている。本文庫には「御抄」の写本一部、明暦二年に行われた講釈の聞書として、飛鳥井雅章筆記系統のもの一部、岩倉具起筆記系統のもの二部、更に詳細は不明乍ら後水尾院流の注釈とされる「伊勢物語講本」の伝本一部が蔵されている。後水尾院及びその周辺の人々の伊勢物語享受の実態を探る為には、これらは不可欠の資料である。



支子文庫の伊勢物語関係書は、他の二文庫に比べると量的にはやや少ないが、その中でもやはり目を引くものはある。先ず無外題の伊勢物語注釈書一部(大本一冊)が存する。近世中期頃の書写であるが、原本は宗祇(1421~1502)若しくはその周辺の人物の講釈聞書と思われ、又一方で物語内の人物に歴史上の人名を当てるなど、宗祇以前の古注的要素も併せ持っている面白い資料である。同文庫には更に、奈良絵本の伊勢物語一部(大本二冊)を蔵する。紺地に金砂子を撒き金泥で遠山雲



霞・海辺・草花等を描いた表紙を持つ、所謂嫁入本仕立の本で、全48面の極彩色の挿絵を持つ美本である。挿絵の構図は嵯峨本によって確立されたものを踏襲しているが、配色も良く、無色の嵯峨本に比べれば格段に美しいものである。(写真は106段の挿絵) 同本も又在九州国文資料影印叢書に収められたが、モノクロ写真の為原本の美しさが半減されているのは惜しい。

叙上の三文庫本以外にも言及すべきものは多いが、紙幅の関係上、文学部所蔵の「伊勢物語能愛抄」(大本一冊) 一部を紹介するに留める。同書は、北野天満宮能愛法師が江戸で行った講釈の聞書で、他に類本の存在は報告されていない。注釈の系統から言えば、後水尾院→盛胤法親王→能愛法師へと伝えられた後水尾院流の注釈書であり、前記音無文庫中の諸書の記述とも密接な関係がある。と同時に、堂上の学問が北野の連歌師を通じて地方に広まっていったことを示す好資料でもある。

以上のように、本学の伊勢物語関係の蔵書はかなり充実したものである。しかも音無文庫本の大部分は開架書庫内にあり容易に原本に接することができ、又別置扱いされているものも殆どがハード・コピーによる複製本が作成されているので、今後一層の活用が期待される。(文学部助手)

### 中央図書館貴重文物展観 (第6～8回)

本年度後半の標記展観資料としてヨーロッパ製の古地図を取り上げ、3回に分けて展示した。本文はその古地図に付けられた教養部小野教授による解説である。なお、同解説は「大学広報」(No. 416, 423, 428) に展観と同時に掲載され全学に配布されている。

展 観 場 所 中央図書館メインロビー

展 観 期 間

第1回 昭和56年9月28日(月)～10月31日(土)

第2回 昭和56年11月9日(月)～11月30日(月)

第3回 昭和56年12月14日(月)～昭和57年1月9日(土)

### 展 観 資 料 解 説

小 野 菊 雄

#### 『日本およびアジア地方諸図』 — 16～19世紀ヨーロッパ製 —

#### は じ め に

本学附属中央図書館には、故長沼賢海名誉教授が蒐集されたものなどヨーロッパ製古地図が若干所蔵されているが、たゞこれらは今日では貴重書であり、従ってあまり我々の目にふれる機会がない。

しかし、これらの中には世界地図史上に有名なものなど興味深いものが少なくないのであって、それらを展観することは、また何らかの意義を有するものと考え次第である。

今回は日本図および地図の上で多様な変化をみせた日本の北方地域を含むアジア図を中心に展観を試みてみたが、このうち、Sieboldの「日本境界略図」は、医学分館所蔵の「日本」初版本の付図である。

#### ・ ・ その 1 ・ ・

「アジア図」 作者・年代不詳 刊行地不明 (表紙・地図表題はドイツ語)

この図は作者・作成年代が判然としないが、内容はオランダの有名な地図製作者 A. <sup>オルテリウス</sup>Ortelius (1527～98) の「アジア図」(1567) とほぼ同じである。

ここにみられる日本は、リスボン生まれの地図製作者 B. <sup>ベルヌー</sup>Velho(1568没)の「世界図」(1561)や Ortelius の「タルタリア図」(1570)などの日本と同じ形状である。すなわち、IAPAN とある南北に長い島には、Meaco(都)、Xote(?), Amanguca(天草)、Bungo(豊後)など九州を含む地名がみられ、その南東には TONSA(土佐)として四国が、南には Congaxuma(鹿児島)のある島など3~4島にわかれた九州が描かれている。

16世紀の末 L. <sup>テイセウ</sup>Teixera の日本図の出現までは、ヨーロッパ製地図にみる日本は実際とはほど遠い数種類の形状で示されたのであるが、この図の形もその一つである。なお、この図には記載はないが、Ortelius 図では IAPAN の東にのぞく陸地に ZIAMPAGV すなわちチパングの地名がみえる。

#### 「日本諸島図」 L. Teixeira, 1595年 アントワープ

ポルトガルの地図製作者 L. Teixeira (1564頃~1613)の日本図は、オランダの A. Ortelius の世界地図帖・増補版(1595)に第107図として入れられたものである。

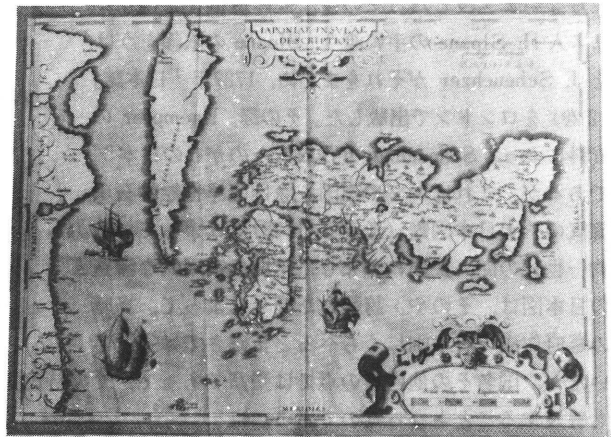
この図は、ヨーロッパでのそれまでの日本図にくらべて、海岸線の出入、山脈・河川・湖の描写、国名の記載などその形状、内容ともに大きな進歩をみせたものである。

この図の東西に長い日本の形や東の海にある実在しない島々などは、最も古いタイプの日本図である行基図系統の一つ唐招提寺蔵日本図と同じである。しかし、唐招提寺図では島となっている志摩国が、この図

では紀伊半島に正しく入れられており、また、東北部の海岸線、九州の形、山脈や河川などの描写は、桃山時代の日本図屏風と同じ特色をみせていて、全体的に屏風図の流れを汲むものとされている。いずれにせよこの図は、Bacasa(若狭)島などの誤りはあるが、17世紀中頃までヨーロッパにおいて影響を与えた地図である。

#### 「新アジア図」 N. Visscher, 1657年 アムステルダム

オランダの地図製作者 N. <sup>フィッシャー</sup>Visscher (1618~79頃)のこの図では、日本とその周辺は Bacasa 島、細長い九州、島になっている朝鮮半島など Teixeira 図の影響がみられる。また、日本の北方地域については未だ何も示されていないが、その北のアジアとアメリカの間に海峡が描かれている。すなわち、突出したアジア北東部と AMERICAЕ PARS(アメリカ地方)との間には、北のタルタリア海と南のオクシデンタル(西の)海を結ぶ海峡があり、それには Anian という名称がつけられている。この「Anian」は、イタリアの J. <sup>ガスタルディ</sup>Gastaldi が1561年の地図ではアジアの北方地域に、翌62年の地図では海峡にはじめて使ったといわれるもので、それは彼が <sup>マルコ</sup>Marco Polo の旅行記にあった中国南方の地名からとったものである。もっとも、当時はこの「Anian」海峡はあくまでも想像上の産物であって、アジアとアメリカの関係については、まだ誰も知らなかったのである。



「日本王国図」 P. Mortier, 年代不詳 アムステルダム

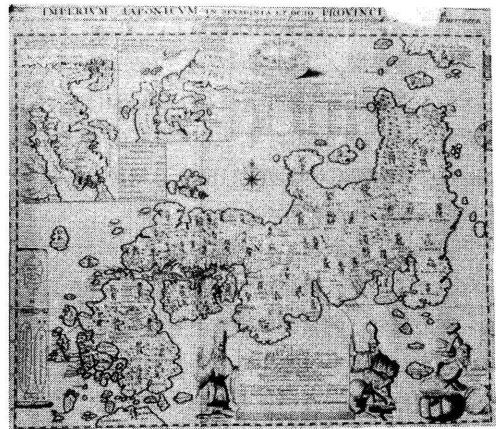
オランダの地図出版者 P. Mortier (1724没) のこの図は、M. Martini (1614~61) の「日本王国図」(1655) を複製出版したものである。

Martini はイエズス会宣教師として1643年からその死に至るまで中国で布教活動をした人であるが、ヨーロッパに一時帰国した1655年、彼はオランダの地図製作者 J. Blaeu の世界地図帖のうちの「シナ地図帖」を刊行した。その第17図が日本図であるが、そこでは関東~東北の海岸線は1643年この沖合を北上したオランダ東インド会社の M. Vries の報告にもとづいてかなり正確に描かれ、Teixera 図にある実在しない島々はみられない。また、中部地方や瀬戸内の海岸線は、東北の海岸で捕えられ、釈放後江戸から長崎へ旅した Vries の僚船プレスケンス号一行について記した A. Montanus の「日本誌」(1650頃) 所収の地図と類似している。

Teixera 図よりも正確な Martini の日本図は、18世紀初め頃までヨーロッパで大きな役割を果たした。

「68州に区分された日本帝国図」 E. Kaempfer, J. Scheuchzer, 1727年 ロンドン

E. Kaempfer (1651~1716) はオランダ商館医師として元禄3 (1690) 年から2年間わが国に滞在、帰国後持ち帰った資料をもとに著述をはじめたが、刊行に至らないまま、没した。その後、彼の遺稿などはイギリス人 H. Sloane の手に渡り、Sloane の依頼を受けた J. Scheuchzer がそれをまとめ、1727年「日本誌」(2巻) をロンドンで出版した。その際、Kaempfer の資料によって Scheuchzer が作成したのがこの日本図であるが、これはエゾや四国を除けば浮世絵師石川流宣の「大日本図鑑」(延宝6 (1678)) によっている。約一世紀の間、民間に流布した華麗で実用的な流宣の日本図は、そのやゝ誇張した描写によって、当時の幕府作成の日本図にくらべると正確さでは劣っていたが、国名その他内容の点では豊富であって、その特色をうけついでこの図は、18世紀のヨーロッパでも普及することとなったのである。



なお、左上の付図のうち右の図は、本図では松前が島になっているところなどを Scheuchzer が「大日本図鑑」にもとづいて渡島半島の形に補訂したものである。左の図には、カムチャッカ半島と奥エゾすなわちサハリン、千島などが一体となったアジア北東部が示されている。

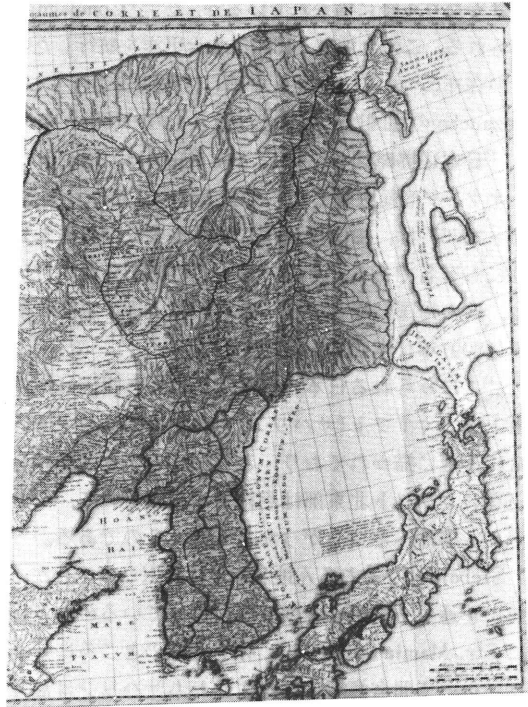
このほか、日本製の羅針盤、わが国から中国各地やオランダなどへの距離表、国・郡・社寺などの数、宗派による数種類の数珠、大黒、恵比寿、歳徳神などが描かれている。また、版によってはいくつかの家紋を描いたものもある。

「シナ・タタール、朝鮮および日本王国全図」 T. Mayer, 1749年 ニュールンベルグ

この図はドイツの地図製作者 T. Mayer (1723~62) が、フランスの地図製作者 J. B. d'Anville (1697~1782) の「シナ・タタール図」(1732初版) を複製出版したものである。

この図をみると、Kaempfer 図と同じ形状の日本の北に大きな「JEDSO-GASIMA」があり、その南部の半島先端は渡島半島の形を示している。この北には、それとは別に南北方向にのびるもう一つの陸地があるが、その東岸の形はサハリンのアニワ湾付近に類似している。また、さらにその北、アムール川(黒竜江)河口付近には「く」の字型の「SAGHALIEN」島つまりサハリンがある。これらのうち、アムール川河口の島はアムール川方面から、また南北に長い土地は南から得られたサハリンに関する知識が、それぞれ別々に示されているのであるが、この地図は、世界の地図史上、最後まで不明な点の多かった地域の一つであるわが国の

北方についての当時の混乱した知識を表わしたものとと言えるであろう。



「アジア図」 Dezauche, 1788年 パリ

この図はフランスの地図学者 G. Delisle<sup>ドリル</sup> (1675～1726) と P. Buache (1700～73) のアジア図を J.A. Dezauche<sup>ドゾシュエ</sup> (1831没) が補訂出版したものである。

こゝにみる北方地域の描写も混乱している。すなわち、本州北方の小島 Matsumai (松前) の北には南北に長い「IESO」島があるが、この南岸から南東岸は渡島半島から根室半島の海岸線を大体示しているのに対して、東岸にはアニワ湾の形が出ており、北海道とサハリンが一つになってしまっている。また、「IESO」島の北には「く」の字型のサハリンが別にみられる。さらに「IESO」島の東にはオランダの Vries の報告による「Etats」島 (国の島、エトロフ島)、その東に「Compagnie」の土地 (会社 [東インド会社] の土地) がある。今日のウルップ島にあたるこの「Compagnie」の土地は、この図では東岸を点線で示すという曖昧さはあるものの一応島として表わしているが、18世紀前半にはアメリカ大陸の一部とした地図も多かった。そのほかこの図では、カムチャツカから南の千島北部や中



部はかなり正確に描かれているが、たゞ「Compagnie」の土地の東に、点線ではあるが「J. de Gama」の土地がみられる。この土地は、1590年北太平洋を航行した船長 J. da Gama の話によるものであるが、この付近でのその存在については18世紀中頃には疑問視されており、1776年の Buache の地図にも描かれていない。この点 Dezauche の地図は、補訂とは言うものの18世紀末のものとしては内容的に少し後退している。

「日本境界略図」 P.F. von Siebold, 1832年 ライデン

オランダ商館医師として文政 6(1823)年から文政12(1829)年までわが国に滞在した P.F. von Siebold (1796~1866) は、帰国後日本に関する多くの著述をおこなったが、なかでも大著「日本」(1832~52) はあまりにも有名である。その「日本」の第1分冊に付けられたのがこの「日本境界略図」であるが、この原因は、彼の帰国に際して起った事件によって幕府に捕えられ、獄死するに至った幕府天文方高橋景保が文化 6(1809)年に作成したものである。

ここにみられる日本の形状は、本州と四国は伊能忠敬の実測調査(九州は未調査)により、また北海道、南千島、カラフト(サハリン)中部や南部は最上徳内、間宮林蔵その他の人々の調査によっているため、非常に正確に描かれており、とくにカラフトは明確に島として表現されている。ただ、日本の調査が及んでいないカラフト北東部は点線で示されていて、この部分を明らかにしたいという景保の研究意欲が、シーボルト事件へとつながったとも言えるのである。

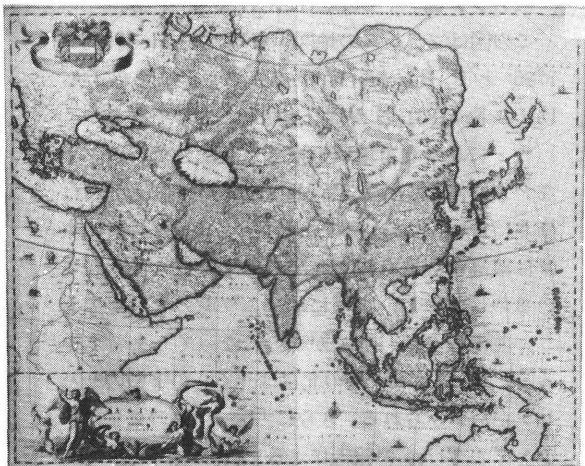
Siebold は、もちろん地名などは翻訳しているが、景保の原図をほぼ忠実に再現したのであり、MIAKO(京都)を通る子午線が経度0度になっているのも景保と同じである。もっとも、彼は大陸とカラフトとの間に Str. Mamia(seto) 1808, 宗谷海峡のところに Str. de la Pérouse 1787など若干の地名を補っているが、これによって間宮海峡の存在すなわちサハリンは島であることが、ヨーロッパに知られるようになるのである。

## ・ ・ その 2 ・ ・

アジア図 N. Visscher 17世紀後半 アムステルダム

オランダの地図製作者 N. Visscher (1618~79頃) による色彩の鮮やかなこの地図は、Teixera型の日本、1643年の M. Vries の報告による「YEDSO」などの形、翌年の A. Tasman の探検にもとづくオーストラリア北岸からニューギニア付近の形など、17世紀のオランダ最大の地図出版者 Blaeu 家の Joan (1596~1673) による「新世界全図」(1648) のアジア地方の形状をうけついでいる。もっとも、Visscher はアジア北東部の北へのはり出しをかなり小さくしたりするなど若干の修正をおこなっている。

なお、この図の内陸に無数の点で細長い帯状に示しているのは砂漠であって、「Xamo Desertum」と記してあるうちの「Xamo」は砂漠の中国語音であり、この表現法が中国から伝えられたことを示すものといわれる。また、カスピ海は古くからの横長の形で描かれ、ボルガ川下流の都市サライによるとみられる「MARE DE SALA」(サラの海)の名称が記されている。



大タタリヤ、大モンゴル帝国、日本およびシナ図 F. de Wit 1660年 アムステルダム

F. de Wit (1616~98) は、1648年アムステルダムに仕事場を設け、1670年頃から世界地図帖などを刊行した地図出版者であるが、その事業は彼の息子と孫を経て、1706年 P. Mortier へ、さらにその後 J. Covens と C. Mortier へと引きつがれたのである。



この図をみると、Blaeuの流れを汲むN. Visscherのアジア図のうちの当該地域とかなり類似している。ただ、Visscherの日本はTeixera型であるのに対して、この図のそれは異なる形を示している。すなわち、中央が少し突出した東北北岸、南に長い房総半島、琵琶湖と大阪湾の直接的なつながり方、東にある三つの島々などがみられるのであるが、これは1650年フランス人宣教師Brietがポルトガル人宣教師Cardimの著書所収の地図をもとに作成した日本図によっているためであり、このBriet図の源流は、桃山時代に屏風に描かれた日本図に求めることができるのである。また、この図ではアジア北東部の北へのはり出しは全くなく、その部分の海岸線はなめらかな曲線で描かれている。

そのほか、カスピ海にはサラ、バクーと三通りの名称が記してあり、アジア北東部には、旧約聖書に登場し、中世ではアレクサンダー大王が遠征の際にアジアの果ての地に閉じ込めたとして、地図のその部分に描かれた魔物「MAGOG」が地名の形で記されている。

#### アジア図 A. H. Jaillot 17世紀末 パリ

A. H. Jaillot(1632~1712)は、フランスの有名な地図製作者N. Sanson(1600~67)とその息子たちによる地図資料をもとに、1670年から地図製作に従事した人物であり、従って、この図の日本もSansonが採り入れたBriet型のものになっている。

この図の日本の北には大陸から南へ長くのびた半島があるが、その東岸や南岸にはサハリン南岸、北海道東岸から南岸の形状が描かれている。しかし、ここにはエゾの名称はなく、それは「Etats」島(エトロフ)の東に広がる土地に「TERRE DE IESSO」「IEÇO」として登場するのであり、しかもその土地は北アメリカの一部のように描かれているのである。なお、1690年のイタリアのV. M. Coronelliの「東アジア図」なども大陸の半島とエゾの関係はこの図と同じであり、また、この図には18世紀になると出てくるカムチャツカ半島がまだみられないことなどから、この作品は17世紀末のものとして推測される。ただし、アジア北東の海にカムチャツカを思わせる「KAIMACHITES」という名称があることを考えると、18世紀当初としても妥当かもしれない。



そのほか、この図には前記の半島北部やその西には「YUPI」「NIUCHE」などアムール川流域の民族を意味する名称がみられ、また、アジア北東部には旧約聖書に登場する魔物「MAGOG」「GOG」の名がある。

#### インドおよびシナ図 J. Covens, C. Mortier 18世紀前半 (17世紀末) アムステルダム

J. CovensとC. Mortierは、1730年(20年?) P. Mortierの事業をうけつぎ、18世紀のヨーロッパで広くその名を知られるようになったオランダの地図出版者である。彼らはフランスの地図製作者の作品を多く手掛けたが、この図はそのうちのG. Delisle(1675~1726)のものである。

この図の日本はM. Martini型の形であるが、その北にはJaillot図と同様に東そして南へのびる半島があり、そこに「YECO」や「ESO」の名称、また「MATSMEY」「Acqueis」「Tocaptie」つまり松前、厚岸、十勝とみられる地名がある。すなわち、この図では北海道が大陸の半島となり、「Etats」島の東には「会社の土地」が広がっているのであるが、形の上ではJaillot図と似ているものの地名の配置が異なっているこのタイプは、例えばオランダのN. Witsen(1641~1717)の「大タートル新図」(1692)などにもみられる。もっとも、Witsenは「Yeco」を明確に半島として描いているが、この図では「Yeco」の土地が「Japon」とつながっているかどうかは不明だとして、半島の先端をあいまいに表現している。なお、アジア北東部はこの図の範囲外になるため、カムチャツカの知識に関しては不明であるが、Jaillot図や前記のWitsen図などとくらべてみると、内容的には17世紀末頃の知識を盛った作品ではないかと推測される。

#### アジア図 J. B. Homann 18世紀初め ニュールンベルグ

アジア図 G. Matthias Seutter 18世紀初め(1710年?) アウグスブルク

J. B. Homann<sup>ホーマン</sup>(1663~1724)は、1702年ニュールンベルクに地図出版所を設立、以後多くの地図を刊行したことで有名であり、Matthias Seutter<sup>マテウス・ゾイター</sup>(1678~1757)は、1707年アウグスブルクに仕事場を設け、弟 Matheus<sup>マテウス</sup>と共に多数の地図を作成した人物である。

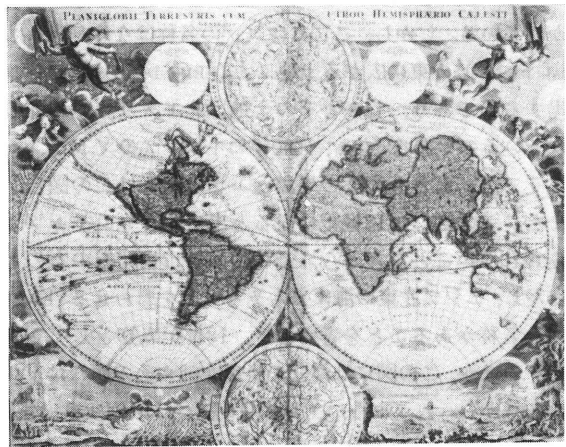
左の Homann, 右の Seutter の二つのアジア図は非常によく似ているが、これは後者が前者の弟子であり、師の作品を主に出版したことにもよっている。例えば、日本は両図とも Briet 型の形を示し、その北にあるサハリン南東部と北海道を一つにした「YEDSO」も、当時の他の地図と少し違って、どちらもいわばずんぐりした形になっている。

なお、両図でニューギニア北東にある「NOVA BRITAN(N)IA」は、イギリス人 W. Dampier<sup>ダンピア</sup>が1700年に到達したニューブリテン島であり、また、アジア北東の北極圏を示す緯度付近に東へ突出する細長い「Caput Glaciale」(氷の岬)半島は、17世紀末から1720年代初め頃まで地図上に見受けられるもので、これらの点から両図の作成年代が大体推測できる。

ところで、よく似ているこの二つの地図にも若干の違いがある。すなわち、Homann 図ではやゝ円形のカスピ海に対して、Seutter 図ではそれは南北に長く、さらにその北東には付近に「Aralkoy」の地名がある小さい湖(アラル海?)がある。また、Seutter 図ではキプロス島や北のノバヤゼムリヤが半島になっているが、ノバヤゼムリヤ「半島」は、例えば1730年の P. J. Strahlenberg<sup>ストラレンベルグ</sup>のシベリア地図などにもみられる。

大地の両半球図および両天球図 J. B. Homann 18世紀初め ニュールンベルク

J. B. Homann が東西両半球で示したこの世界図は、全体的には1648年の J. Blaeu の「新世界全図」(両半球図)に似ているが、たゞ日本とその北の部分は全く異なっている。すなわちこの図では日本の北の「TERRA IEDSO」が「IAPONIA」つまり日本とも連続しているものであり、しかもその日本の形はかなり変形している。また、左の西半球図では、J. da Gama<sup>ホアン・ダ・ガマ</sup>がその沿岸を航行した旨の説明と共に「TERRA ESONIS」の海岸を東へのぼし、カリフォルニア「島」付近でやゝあいまいながらも北アメリカとつないでいる。このようにエゾと北アメリカを関連させる描写は、1713年の V. O. Kiprianov<sup>キプリアノフ</sup>、1733年の J. G. Doppelmayr<sup>ドッペルマイヤー</sup>の地図などにもみられるものである。



なお、この図には F. Magellan, A. Tasman, W. Dampier などの探検航路が点線で示されており、Dampier が1700年に到達したニューブリテン島も描かれているので、この図の作成は18世紀初めの頃と推定できる。

ロシア帝国および全タートル図 J. M. Hasse (Hasius) 1739年  
ニュールンベルク

J. Hasse<sup>ハッセ</sup>(1684~1742)は、ヴィテンベルクの数学教授であるが、Homann の地図出版にも協力し、投影法などの論文を書いたり、多数の地図を作成した人物である。

この図の日本は、中央が湾入した東北岸とその北の「Matmaska」(松前)島や四国北岸の形などからみて、Kaepmfer・Scheuchzer 型である。その日本の北には南北に非常に長い「Eso YEDSO Oku Yeso」の地があり、この地の南部には北海道にあたる「YESO Gasima」の名称



もみえる。なお、「Oku Yeso」(奥エゾ)は江戸時代のカラフト(サハリン)および南千島に対する呼称であるが、「Eso…」の地が南北に長く描かれ、その北部の奥エゾ(カラフト)がアムール川河口のサハリン島に接近している点は注目される。この二つの土地が近いという点では、1733年や40年の J. N. Delisle (1688~1768)の地図と似ているが、しかし Hasse 図は「Eso…」の地の北西部を明らかに大陸と連続させている、すなわちこの地を大陸の半島として描いている点で Delisle 図と異なっている。この点は、日本の北に「Jesogesima」島、アムール川河口にサハリン島を描き、大陸沿岸にサハリン南東部の海岸線を描いた1752年の J. B. d'Anville のアジア図、サハリンは島でカラフトは大陸の半島とした林子平の地図(天明5(1785))や近藤重蔵の地図(文化元(1804))を想起させるものである。

そのほか、この図のアジア北東部には北と東に突出した二つの半島が描かれているが、これはピョートル I 世の命をうけて1728年カムチャツカ東岸を北上し、アジアとアメリカをわける海峡付近まで航海した V. Bering の報告にもとづくもので、1730年頃からロシア製の地図などに登場してくる形である。また、この図では Seutter のアジア図と同様にノバヤゼムリヤは半島となっている。

ロシア帝国および大タタール図 F. L. Güssefeld 1786年 ニュールンベルク

F. L. Güssefeld (1744~1807)は18世紀末から19世紀初めにかけてのドイツの地図製作者であり、この図は Homann の出版所から刊行されている。

この図の日本は Kaempfer・Scheuchzer 型であるが、その北には北海道の渡島半島の部分だけの「Matsumay」島がある。ただ、その北東の「Konosir」島(クナシリ)からカムチャツカまでの千島の島々は比較的正しく並んでおり、また、カムチャツカの東にはアリューシャン列島も示されている。そのほか、アムール川河口にはサハリン島があるが、その南の大陸沿岸には、先端に「Aniwa」岬のある半島つまりサハリン南東部の海岸線が描かれている。

18世紀末のこの地図をみると、カスピ海、アラル海とそれに注ぐ二つの河川、北のノバヤゼムリヤ、アジア北東部の形などもかなり正しく示されるようになってきているが、日本の北方地域に関しては依然として不明確であったことがわかる。

アジア図 Lamarche 18世紀中頃(?) パリ(?)

アジア図 R. Bonne 18世紀末 パリ(?)

両図ともにフランスで作成されたアジア図であるが、左の Lamarche (C. F. Delamarche, 1740~1817) 図の方は、Sanson や Jaillot の資料をもとに18世紀中頃地図帖などを刊行したフランスの G. R. de Vaugondy (1688~1766) の作品を修正したものである。右の Bonne 図には、左上の「M. BONNE」のあとに「海軍水路技師」とあるが、1752年に地図投影法の一つであるボンヌ図法を考案した Rigobert Bonne (1727~94) が水路学者で技師であったことを考えると、「M. BONNE」は Bonne 氏、すなわちこの図の作者を R. Bonne とみてもよいであろう。なお、両図ともにボンヌ図法によって描かれている。

両図の日本は、Bonne 図は少し形が乱れてはいるが、いずれも Kaempfer・Scheuchzer 型である。しかし、その北方は異なっており、Lamarche 図では、北に「く」の字型の「Amur」島(サハリン)、その南に西岸を点線で示した「Jeso」、その東に「Etats」島(エトロフ)や島の形には明示していない「会社の土地」がみられる。一方、Bonne 図では、サハリン島の南の大陸が長方形の半島として突出し、その沿岸にサハリン南東部の海岸線が示されており、北海道は南千島と一緒に「Jeso」諸島のうちの一つの島として描かれている。

また、Lamarche 図のアジア北東部は、1728年の Bering の探検航海の成果を示しているのに対して、Bonne 図では、アジア北東部のチュコト半島、アラスカ、アリューシャンの島々などがかなり正確に示されているが、これは、1778~79年にこの海域を探検調査したイギリスの有名な航海者 J. Cook が作成したすぐれた海図をほぼそのままとり入れているからである。また、オーストラリア東岸やニューギニアとの間の海峡が明示されている点やその東のニューヘブリデスやニューカレドニアの存在なども Cook の探検によるものである。

もっとも、Bonne 図には日本の東方海上に「Rica de Oro」「Rica de Plata」という金の島、銀の島がみら

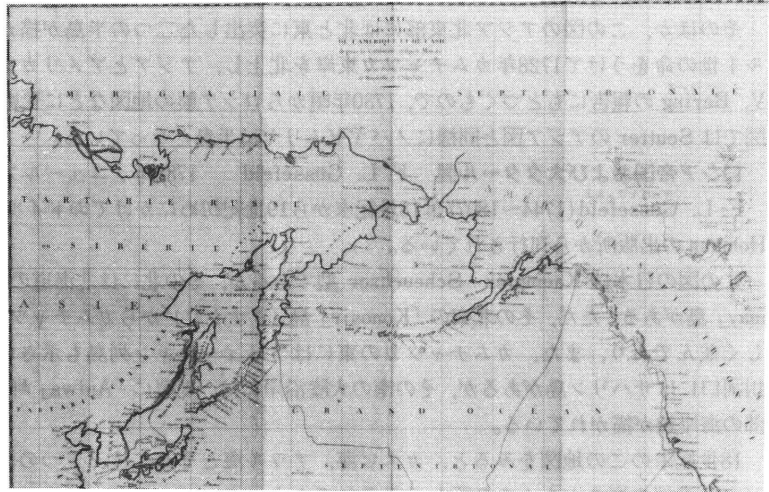


れる。これは、最初は Marco Polo により日本にあてられていた「黄金の国」が、いわば東へ移動したものであり、17世紀前半オランダ東インド会社が北太平洋に船隊を派遣したのは、この島々を探索するためでもあった。金銀の島が19世紀末の地図に未だにみられるのは興味深いところである。

なお、Bonne 図の子午線の度数は、上方はカナリア諸島のフェロ（イエロ）島を基準とし、下方はパリを基準としているが、フェロ島を基準とする方法は1634年にはじまり、1800年頃までフランスの地図に使われたものである。

#### アメリカおよびアジア沿岸図 J.F.G. de la Pérouse 1798年 パリ

ラ・ペルーズ<sup>ラ・ペルーズ</sup>(1741~88)は、1785年8月2隻の船を率いてブレスト港を出発、1786年1月大西洋から太平洋に入り、1788年初めオーストラリアのボタニー湾出港後消息不明になるまで、その北部を中心に太平洋海域で探検調査をおこなったフランスの航海者である。彼はこの航海の途中、立ち寄ったカムチャツカの港からJ.B. Lesseps<sup>レセップス</sup>に陸路本国へ報告書を届けさせたが、これをもとに1798年、彼の航海記



とアトラスが刊行されたのであり、この地図はアトラスの第15図にあたるものである。

ところで、この図には la Pérouse の航路が示されているが、1787年、彼は日本海を北上し、大陸とサハリン西岸の間の海域を北緯52度付近まで達した。しかし、そこから北は昔は航行できたが、今はアムール川からの土砂によって航行は不可能と判断し、針路を南へ転じ、宗谷海峡を抜けてオホーツク海へ出たのである。彼のこの航海によって、従来一つとされてきたサハリンとエゾ(北海道)は分離していることがヨーロッパでも明らかになり、その間の海峡(宗谷海峡)にラ・ペルーズ海峡の名称がつけられたのである。また、今までアムール川河口付近に描いていた島とエゾと一体となった形で描いていた土地とが、一つの陸地サハリンであることも明らかになったのである。ただし、この図では北海道の西半分は不明であり、日本の形もまだ Kaempfer・Scheuchzer 型のまゝである。

なお、この図の北アメリカの部分には、1771年の S. Hearne のカパーメイン川下流への探検、1789年の A. Mackenzie によるマッケンジー川から北極海への探検の成果が記されている。

### ・ ・ その 3 ・ ・

#### 16世紀～18世紀ヨーロッパ製古地図

今回の展覧は、プトレマイオス世界図、オセアニアに関する地図、オランダの諸地方図その他多様であるが、このうちオランダ諸地方図などは興味深いものであり、また、貴重な古地図ではないかと思われる。

#### プトレマイオス世界図 S. Münster 1550年頃 バーゼル(?)

この図には裏にタイプで「アジアー1550年頃、Muenster による地図、木版、フォリオ」とある。S. Münster<sup>ミュンスター</sup>(1489~1552)は、1544年世界諸国の地誌を主とし、木版の挿し絵や地図を付した「Cosmographia」を著わした地理学史上に著名な人物である。しかし、この世界図は彼の知識を表わしたものではなく、表題にあるようにローマ時代の有名な天文・地理学者 Ptolemaeus<sup>プトレマイオス</sup>による世界図である。Ptolemaeus は2世紀中頃、

当時知られていた世界の約8千の地点の経緯度表を主体にした「地理学」という書を著わし、それにもとづく地図も作成した。この業績は中世ヨーロッパでは忘れられていたが、15世紀初めのラテン語訳で復活し、その後は15世紀中頃の印刷術の発明とあいまってヨーロッパに普及したのである。

西はアフリカ北西のカナリア諸島から東は180度(中国の西安付近)まで、北は「スカンヂア」島や「トゥーレ」から南はナイル川水源付近までを含む彼の世界図は、投影法(円錐図法)を用いた最初の地図でもあり、そこには正しく内陸湖としたカスピ海、アジアの大半島(今日のマレー半島)、アジアを東西に走る山脈(今日のヒマラヤ山脈)、ナイル川の水源地帯等々興味深い様々の特色を有している。

そのうちの最大の特色は、大きな Taprobana 島(セイロン島)のあるインド洋が、アジアとアフリカが南で接続した陸地によって閉じられた形の湖になっている点である。もちろん、Münster の時代には、これは誤りであることはすでに知られており、従ってインド洋の南には「Ptolemaeus による未知の土地」と記されている。もっとも、このような誤りはあるものの、Ptolemaeus の世界図および地方図は、大航海時代の到来までは最も重要な地図であった。

なお、この図には北ヨーロッパに「MARE GLACIALE」(氷の海)と「Septentrional Regiones」(北の地方)として西へ突出したスカンヂナヴィア半島などが描かれているが、これらの知識は Ptolemaeus にはなかったものであり、このような一部分の改訂版の刊行は1482年にはじまったといわれる。そのほか、世界の周辺に描かれた人物は風の神であり、それぞれがまた方位も示している。また、この図の裏には、風の名称と向きを示す模式図が記されている。

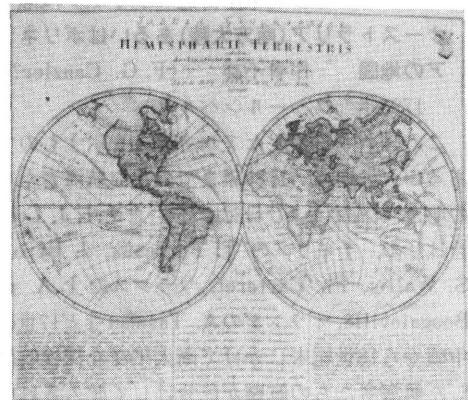
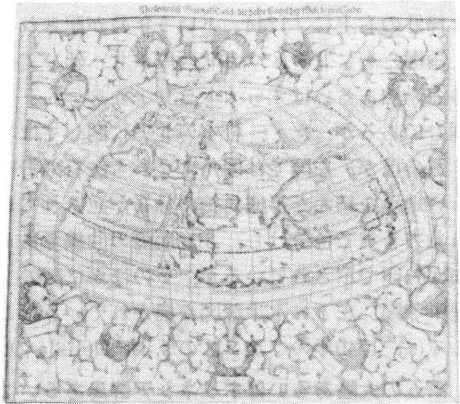
両半球図 J. C. Schreiber 1720~30年 ライプチヒ

J. Schreiber (1676~1750) はライプチヒの地図製作者である。両半球のうちの東半球図には粗雑な形の日本がみられ、その北には「IEDSO」半島、さらにその東に接して大きな陸地がある。この陸地は左の西半球図につながる「Am. Sep.」(北アメリカ)であるが、その南岸には「TERRA ESONIS」(エゾの土地)と記され、カリフォルニア半島に接続している。アジア北東端の東と北への二つの半島は、1725~30年の Bering の探検の結果、地図上に登場してくる形にも似てはいるが、北への半島などは1725年の Homann のカムチャツカ図のそれの方により類似しており、この図の裏にメモされている「1720~30」の作成年代で妥当と思われる。なお、下方に小さく描かれている虹、竜巻その他の自然現象も、前回展覧の Homann の両半球図とその描写は全く同じである。また、中央には上に Copernicus、下に Tycho Brahe による太陽系惑星の運動理論の模式図が示されている。

両半球図(左) Bor 1744年 ニュールンベルク(?)

両半球図(右) Borus 1744年 ニュールンベルク(?)

この二つの図は、その内容や表題にある作者の肩書きが同じであることからみて、同じ人物による作品と考えられるが、R. V. Tooley の「地図製作者事典」(1979)によると、1764年にニュールンベルクの Homann 出版所刊行のドイツ郵便馬車連絡地図を作成した J. J. von Bors と <sup>ボルス</sup> という人物があり、二つのうち左図の右下隅に小さく「磁針の傾き」というドイツ語が記されていることからして、<sup>ボル</sup> Bor (Borus) をこの Bors とみてよいかもしい。とす



ると、この両図はニュールンベルク刊行と推測される。なお、左図では「1744」と明記してあるが、右図は枠外の右上に「1744」という年号が記されている。

両図ともに北アメリカ北西岸が北へ延びていることやオビ川河口などのシベリア北岸およびその北東端の海岸線あるいはオーストラリアからニューギニア付近の海岸線等々の類似など全体的にみて内容はほぼ同じであるが、たゞ、日本の北方に関しては右図には千島が全く記されていないなど若干の相違がある。

そのほか、左図では偏角すなわち磁石の針が指す北と地理的北極とがなす角度、いわずれどの角度が等しい地点を結んだ等偏角線の分布が記されており、偏角0度の線をはさんで、東へずれる方を赤、西へずれる方を黄で色分けし、5度間隔の曲線であらわしている。一方、右図には、赤道付近の風(貿易風)の風向が矢印で示されているが、そのほかに図の上方に北極中心、下方に南極中心の半球図、右下にいわゆる陸半球図、左下に水半球図が描かれている。こうした四つの半球図を両半球図の周囲に示しているものとしては、1740年のフランスのJ. N. Delisleの地図などがある。

### 第五の大陸あるいはポリネシア群島あるいはオーストラリアあるいは南インドの地図

F. G. Canzler 1795年 ニュールンベルク

F. Canzler(1764~1811)はゲッティンゲンの教授で、Homannの地図出版所のために活動した人である。この図はアジアを緑、ポリネシアを西部、中部、東部とし、各々黄、濃緑、赤で色別しているが、今日のオーストラリアは中部、ニュージーランドは東部に入れている。

この図では、1768~75年のJ. Cookの探検の成果がオーストラリア東岸の海岸線、オーストラリアとニューギニアの分離、南・北両島から成るニュージーランドその他に示されているが、VAN DIEMEN'S LAND(タスマニア)が島とわかるのは1798年、オーストラリア北部アーネムランド北西のメルビル島などの存在が判明するのは19世紀初めであるので、この図ではこれらの島々はまだ大陸に含まれている。

ところで、この図では今日のオーストラリアには「ULIMAROA oder NEU=HOLLAND」とある。このうち、「新オランダ」は当時の一般的呼称であるが、「ウリマロア」はニュージーランドのマオリ族による呼称であり、この名称は1780年のスウェーデン製地図に登場し、1818年頃までドイツやスウェーデンの地図にみられたという。また、今日のようにオーストラリアの名称が使われるようになるのは19世紀初めであり、この図でもオーストラリアのところにはまだみられないことから、この図の表題にある「オーストラリア」は今日のオーストラリアを指すものではなく、「南方大陸」の意味に解すべきであろう。

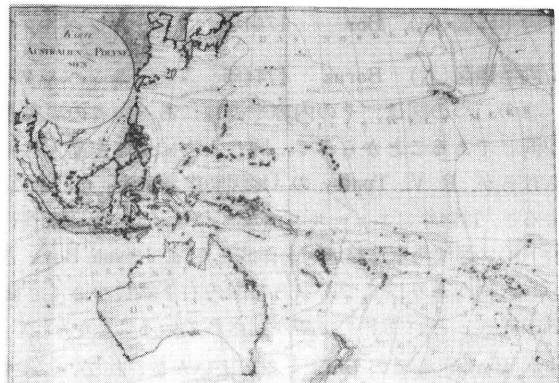
なお、この図の日本はKaempfer・Scheuchzer型であり、その北に北海道とサハリンが一体になった「MATSUMAT」島、それにKonasir(クナシリ)、Urup(ウルップ)などの島が描かれている。そのほか、Sandwich諸島は今日のハワイ諸島であるが、その西方、日本の南西付近には金島、銀島が示され、さらにもう一つ「Lots Weib島おそらくR. de Oro」という島がある。この「Lots Weib」島は、1788年スペインのM. Mearesが航海の途中北緯29度51分、東経157度7分のみたという高さ「370フィート」の岩の島「Lot's Wife島」である。

なお、右上の略字説明のうちの下の三つは、岩礁、浅瀬、小島嶼をあらわす記号であり、それは、例えばオーストラリア北東岸付近のディアナ浅瀬などに使われている。

### オーストラリア(南方大陸)あるいはポリネシアの地図 作者不詳 (F. G. Canzler?)

1792年 ニュールンベルク

この図も今日のオセアニア地方を示すものであるが、表題に「1789年までの主な航海者たちの地図、航海記および日記による」とあり、J. Cookをはじめ、イギリスのT. Furneaux, J. Byron, S. Wallis, Ph. Carteret, フランスのL. A. de Bougainville, オランダのA. Tasmanなど17世紀中頃から18世紀末にかけて南太平洋を探検航海した航海者たちの航路が色分けして記入されて



いる。

この図は内容的には F. Canzler の「第五の大陸」図と同じであり、アジアを赤、その他を黄で色別している点やニュージーランドの山脈の描き方などの共通性からみて、これも Canzler の作品としてよいかもしれない。

なお、この図でも今日のオーストラリアには「新オランダ」とあり、また、「Lot's Wibe Rica de Oro」と記している。そのほか、「第五の大陸」図も同じであるが、地図上方にはグリニッジを基点にして西へ、下方では東へ数えた場合の経度が記されている。

#### オランダ地方図 5葉 N. Visscher 1660年 アムステルダム

オランダの地図製作者 N. Visscher (1618~79頃) によるオランダ諸地方の地図であるが、下界の(1)の裏に鉛筆で「1660」という年号が記されている。いずれも表題の周辺の人物などを鮮やかに描き、行政区域別に色分けしたり、都市を赤で示すなど色彩が豊かであり、都市、建物、樹木、山々など細かい描写がなされている。なお、各図には方位盤が描かれているが、地図の右側がおよそ北々東もしくは北にあたる。以下、それぞれについて簡単にみていくが、括弧内の数値は、各図の大体の縮尺である。



(1)オランダ図(1:30万) 左上にハーグ、ロッテルダム、ライデン、中央上部にアムステルダム、その上にハーレムなどの都市がみえる。「ゲルマニア海」すなわち北海に面する海岸には砂丘が描かれており、この北海やゾイデル海には、前回展観した Visscher のアジア図の砂漠と同じ方法で、多数の点でもって浅瀬を表わしている。ところで、オランダの干拓事業は16世紀に本格化し、とくに17世紀前半からは風車の大型化などともなって大規模におこなわれるようになったが、アムステルダムの北(右側)にある「BEEMSTER」「PURMER」など緑で描かれ、整然たる土地割りがみられる地域は、17世紀前半に干拓された「MER」(湖)である。その他にもポルダー(干拓地)を見出すことができるが、アムステルダムの左上にみえるハーレム湖の干拓は、この地図から2世紀後の19世紀中頃になる。なお、左下隅の別図は、ゾイデル海入口のテクセル島などの島々である。

(2)デルフラント、ジールラントおよび周辺島嶼図(1:10万8千) 右上にハーグ、中央や下にロッテルダムがあるが、ハーグからその左下のデルフトにかけては、緑で示されたポルダーが多数みられる。なお、左上の Goeree 島は今日では東(下側)のオーバーフラケール島と連続している。この図の浅瀬の部分では、点の集まりの粗密によって、その水深の深浅を表現している。また、上部の北海には海戦が描かれているが、これは1652~54年のオランダ-イギリス戦争の際の両国艦隊の戦いを描いたものであろう。

(3)ゾイトホルラント図(1:11万3千) 右上端にゴータ、中央上にドルトレヒト、中央左にブレダなどがある。中央にみられる水域は、今日では方位盤が描いてある付近までヴァール川の沖積作用が及んでおり、この図では湾岸にある Geertruydenberg <sup>ヘルトルイデンベルク</sup> も現在ではすこし内陸に入っている。

(4)レノラント、アムステラントおよび周辺地方図(1:12万5千) 左上端にハーグ、その右下にライデン、右上にハーレム、や、右下に半円形の大都市アムステルダムがある。(1)と同様に海岸砂丘が起伏をもって描かれているが、その中に白く「velt」(耕地, 土地) が点々と記され、そのうちの右上の「velt」には、村落ちしきものが描かれている。また、砂丘の中を北海沿岸に達する道路がいくつかあり、両側に樹木(垣根?) が並んでいるのもみられる。

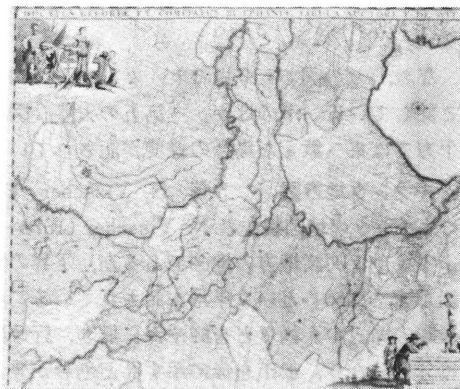
(5)ズートファニア図(1:20万) 左上にニムメヘン、その右にアルンヘム、中央にズートヘンなどの都市があるが、この図では山々、森林、村落、教会、風車その他細かい記載がおこなわれている。主に右側に多い湖状の地域は泥炭沼沢地であるが、そこに道路が走っているものもみられる。図の左端中央から北西

へ、エメリクやアルンヘムの傍を流れているのがライン川である。

**オランダ地方図** 2葉 F. de Wit 1660年(?) アムステルダム

この二つの地図は、F. de Wit (1616~98) の作品であるが、Visscher 図と同じく見事な地図である。作成年代の記載はないが、Visscher 図とほぼ同じ頃であろうか。以下、この2葉についてみるが、番号は Visscher 図からの連続番号としておく。

(6)ゲルドリア、ズートファニア図(1:31万5千) 中央や、左に長方形のユトレヒト、中央にアルンネムなどの都市、右上にゾイデル海がみられるが、左下から右上すなわち北西へ、さらに西流するのがライン川である。左下隅、その流域にデュッセルドルフがある。右下に多数の点で示されているのは泥炭沼沢地である。この図には右下に一人の人物が手に持つ形で記号の凡例を記しているが、これらの記号は、都市、要塞、方形堡、村落、邸宅、修道院、農民定住地(?), 水車、風車、廃虚になった邸宅などをあらわしている。



(7)ユトレヒト地方図(1:12万) この図の範囲は、(6)の右上部の一部分の地域にあたるが、中央に台形のユトレヒト、下に円形のアメルスフォルト、右端に半円形のアムステルダムがみられ、左下から北西へライン川が流れる。ユトレヒト市街、道路沿いの建物、樹木その他のものが細かく記され、また、左下のアメルスフォルダー山脈の鳥瞰図の描写、そこを走る道路と樹木(?)などは興味深いものがある。また、左下の泥炭地には道路、家屋、短冊型の土地割りがかかりみられる。なお、この図では、右側は大体北々西の方向になる。

## 資料紹介

### 全国・地域共同利用大型図書の備付けについて

文部省では昭和53年度から各国立大学の申請を受けて、地味で高価なため入手が困難であった大型図書の配分をしています。これは人文・社会科学分野の資料で全国・地域共同利用を目的としています。

本学でも既にシャルル・ペラ文庫をはじめとする大型図書を中央図書館に備付けています。

次のリストは各国立大学に昭和56年度までに配分された大型資料名の一覧です。利用に際しては、貴重書扱いのものやマイクロ形態のものもありますので、前もってそれぞれの大学図書館へ問い合わせてください。

○印が付いているものは資料の目録、紹介、解説等が中央図書館参考図書室にあります(昭和56年12月末現在)。

#### 大学別全国・地域共同利用大型図書備付一覧(昭和53年度~昭和56年度)

##### 北海道大学

- ボリス・スヴァーリンコレクション(ロシア革命運動資料)
- 18世紀ロシア研究叢書
- 英・独・仏語によるソ連東欧研究コレクション
- ドイツ法制史・実定法関連コレクション(ティーム教授旧蔵)
- 英国初期文芸誌コレクション
- 英国外務省外交記録:ロシア・ソ連関係文書 1892~1945
- 基礎法学並びに一般史関係コレクション(ティーム教授旧蔵)

##### メ教授旧蔵)

##### 北海道教育大学

- 英国議会教育関係議事録

##### 小樽商科大学

- フランス革命期刊行文書及研究書

##### 弘前大学

- 経済学古典コレクション

- 初期英語文献協会出版物

##### 東北大学

- ハンサード英国議会議事録

- 米国政府刊行物・議会議事録

- 米国判例体系
- 英国古書集成
- 米国各州判例集
- 19世紀英国議會報告
- 秋田大学**
- 児童発達, 精神病学及び心理学古典コレクション
- 山形大学**
- 上杉文書
- 福島大学**
- 19~20世紀ロシア・ソビエト研究
- 茨城大学**
- 英国政府刊行統計資料集成
- 図書館情報大学**
- ロシア・ソ連 書誌・図書館学資料集成
- NTIS 図書館学・情報科学研究レポート1971-1976
- 筑波大学**
- 心理学・精神病学書コレクション
- 16~18世紀刊行キリシタン関係書籍コレクション  
(マックス・ベンソン ジャポニカ コレクション)
- バウハウス双書と展覧会目録コレクション
- 宇都宮大学**
- 世界農林業センサス: 日本
- 群馬大学**
- 柳営日記
- 埼玉大学**
- ドイツ帝国統計書
- 現代政治学基本文献集
- 経済統計基本文献集
- 千葉大学**
- ドイツ議会議事録及議会資料
- イギリス知体験
- ゲルマン史料集成一史家・法律・国王文書等
- 東京大学**
- マザラン誌コレクション
- アラブ文化・アラブ学研究コレクション
- オーストラリア総合法令集, 判例集体系 (連邦・各州)
- インドネシア関係文献コレクション
- 英国政府刊行物
- 民国時代公文書資料
- 舌耕文芸関係資料
- 米国連邦議会資料集
- 東京医科歯科大学**
- ルーヴィエール文庫
- 東京外国語大学**
- アラビア現代史料
- ブラジル・コレクション
- モンゴリアン・カンジュル
- 東京学芸大学**
- ドイツ教育学コレクション
- 英国教育学文献集成
- フランス教育学集書
- ロシア・ソビエト 教育研究雑誌コレクション
- 東京芸術大学**
- 音楽学位論文集
- 交響曲1720-1840
- 東京商船大学**
- 「キャラバン マリタイム ブックス」コレクション
- アメリカ海事関係裁判判例集1(1923)-33(1955)
- 東京水産大学**
- チャレンジャー号探検記

- お茶の水女子大学**
- 女性の歴史コレクション
- 一橋大学**
- フランス経済学コレクション
- 横浜国立大学**
- 中国方志叢書
- 世界各国地図書集成
- 新潟大学**
- 欧州各国公式経済統計資料
- 科学史関係文献コレクション
- 長岡技術科学大学**
- 工学・技術政策関係文献
- 富山大学**
- 承政院日記
- 金沢大学**
- フランス法律判例コレクション
- 注釈付州主題別法令集
- 福井大学**
- ハクリュート協会叢書
- 山梨大学**
- 障害者の社会参加映画
- 信州大学**
- アメリカ合衆国経済関係官庁及び行政委員会資料
- 岐阜大学**
- 静嘉堂文庫
- 静岡大学**
- 国際連盟関係資料1920-1946
- 名古屋大学**
- フランス官報及議事録
- ハンサード英国両院本会議録
- インド立法関係資料集
- ホブスを中心とするイギリス思想史原典コレクション
- 18・19世紀ヨーロッパ総合雑誌集成
- 愛知教育大学**
- コロンビア大学教育学叢書
- トイブナー古典叢書
- 保健体育・レクリエーション研究文献集成
- 三重大学**
- 明治・大正・昭和期土地経済及び経済統計資料
- 滋賀大学**
- アメリカ産業会議刊行物
- 京都大学**
- アイルランド大学出版局英国議會資料シリーズ
- ロシア帝国議会議事録
- フランス国民議会議事録
- ドイツ帝国議会議事録
- 国立中央図書館(台湾)善本漢籍コレクション
- イタリア史誌
- ペルシア語文獻資料集成
- ワイマール共和国コレクション
- 京都教育大学**
- 米国教育情報センター文献資料
- 京都工芸繊維大学**
- ポスター 1898-1901
- 大阪大学**
- 米国政府所蔵日本国政府外交文書
- 中国方志叢書
- ユダヤ研究コレクション
- 欧州各国公式経済統計資料1841-1970
- 法学及び国際法関係図書コレクション
- 大阪外国語大学**
- 北欧の民俗学・歴史関係コレクション
- イタリア史資料集成



- イタリア著作家叢書  
**大阪教育大学**  
 知性(旧名:学校と社会)  
**兵庫教育大学**  
 全米カリキュラム資料集  
**神戸大学**  
 ○ロシア・ソ連出版日本関係文献  
 ○米国議会公聴会記録  
 ○米国議会委員会刊行物(1911-1969)  
 ○米国議会全刊行物(1970-1976)  
 ○米国主要会社年次報告書(1844-1978)  
 ○NY証券取引所上場会社SEC届出10-K年次営業・財務報告書(1964-1972, 1977-1979)  
 ○NY証券取引所上場会社株主向年次報告書(1951-1972, 1978-1979)  
 国連公式記録集  
**神戸商船大学**  
 ○近世の廻漕史料:東北編  
**奈良教育大学**  
 ○アメリカ主要大学教員養成関係学位論文集  
 ○ドイツ・スポーツ教育学コレクション  
**奈良女子大学**  
 ○都市問題博士論文集1861-1976  
**和歌山大学**  
 心身障害者の社会参加と平等に関するコレクション  
**鳥取大学**  
 四部分類叢書  
 コロンビア大学教育学叢書  
**島根大学**  
 ○ドイツ最高裁判所全判例集  
**岡山大学**  
 ○ドイツ帝国統計書  
 ドイツ歴史史料集成  
 グローズ・シレー判例集  
**広島大学**  
 ○ハンサード英国議会議事録  
 ○戦争と平和に関する文献目録  
 ○米国国勢調査報告書

- 教育情報資源センタードキュメント  
 ○ドイツ大学史コレクション  
**山口大学**  
 ○四庫全書珍本  
 ○米国議会経済合同委員会報告書(1950-1979)  
**香川大学**  
 ○NY証券取引所上場会社年次営業報告書(1945-1976)  
 アメリカ合衆国連邦裁判所判例集  
**愛媛大学**  
 大日本古文書正倉院編年文書  
**高知大学**  
 中国社会思想史コレクション  
**福岡教育大学**  
 ○英国教育史研究資料  
**九州大学**  
 ○シャルル・ペラ教授旧蔵書  
 ドイツ連邦議会(戦後分)議事録  
 米国判例体系  
 全米判例総合索引  
 欧州各国公式経済統計資料  
 石崎文庫蔵本  
 注釈付米国各州法令集  
 ハンサード英国議会議事録  
**九州芸術工科大学**  
 ○ロイド・モーガン建築学関係コレクション  
**佐賀大学**  
 東寺百合文書  
**長崎大学**  
 ○巨大企業・経済集中関係資料  
**熊本大学**  
 ○アイルランド大学出版局英国議会資料シリーズ  
 ○国会図書館蔵版旧幕府引継書  
 シンテーズ文庫  
**大分大学**  
 中世教会史叢書  
**鹿児島大学**  
 シボガ学術探検報告書

## 昭和55年度「特別図書購入費」による購入図書について

### — 中央図書館 —

下記の資料を購入しましたのでご利用ください。なお「地域共同利用大型図書」として「註釈付 米国各州法令集」を中央図書館に備付けましたので、あわせてお知らせします。

### 昭和55年度 特別図書

| 図 書 資 料 名  | 巻 号        | 刊 行 年     |
|--|------------|-----------|
| 東亜日報 縮刷版 1921-1929   | 第1巻—第40巻   | 1966      |
| 無求備齊韓非子集成  | 第1巻—第52巻   | 1978-1980 |
| Merril Palmer Quarterly.<br>(メリルパーマー 発達行動心理学)  | Vol. 1-25. | 1954-1978 |
| Записки, Восточнаго отдѣлення, императорскаго<br>русскаго археологическаго общества.<br>(中央アジア・東シベリア考古学・民族学基本資料) | Vol. 2-25. | 1887-1921 |
| Société de l'histoire de Paris et de l'Ile de France. Mémoires.<br>(パリ・イール＝ド＝フランス歴史協会雑誌)                         | Vol. 1-51. | 1875-1930 |

|  |              |           |
|--|--------------|-----------|
| Social Sciences Citation Index. 5-Year Cumulations.<br>(社会科学文献引用索引誌 5年累積版)   | 1966-1970    | 1979      |
| Harvard Civilright-, Civilliverties Law Journal.<br>(ハーバード大学市民的権利・自由に関する法雑誌)   | Vol. 1-14.   | 1966-1979 |
| Journal of Conflict Resolution.<br>(紛争解決ジャーナル)   | Vol. 1-23.   | 1957-1979 |
| Journal of Legal Education.<br>(法学教育雑誌)  | Vol. 1-30.   | 1948-1979 |
| Law and Society Review.<br>(法と社会研究)  | Vol. 1-13.   | 1966-1979 |
| American Journal of Correction.<br>(刑事学と社会福祉の専門誌)  | Vol. 1-28.   | 1939-1966 |
| Fonds francais après 1800.<br>(1800年以降のフランス版画史)  | Tom. 1-14.   | 1930-1977 |
| Federal Probation; a journal of correction philosophy and practice.<br>(刑事学の基本雑誌)                                    | Vol. 1-30.   | 1937-1966 |
| Ancient Economic History.<br>(古代経済史)   |              | 1869-1979 |
| 明治初期教育稀観書集成 (復刻)   |              | 1980      |
| Religious Education.<br>(宗教教育)   | Vol. 1-50.   | 1906-1955 |
| 幼児の教育 (復刻)   | 第1巻-第44巻     | 1979-1980 |
| MLA International Bibliography. (Modern Language Association of America)<br>(MLA現代語・現代文学国際文献目録)                      | 1921/25-1975 | 1976-1977 |
| Cognition; international journal of cognitive psychology.<br>(認知; 認知心理学研究)   | Vol. 1-7.    | 1973-1979 |
| Language, Thought, and Culture; advances in the study of cognition.<br>(言語, 思考, 文化; 認知研究)                            |              | 1973-     |
| Educational Psychology; an interdisciplinary series. 19 vols.<br>(教育心理学; 学際シリーズ)                                     |              | 1976-     |
| Food Drug Cosmetic Law Journal.<br>(食物・薬品・化粧品法雑誌)  | Vol. 1-34.   | 1946-1979 |
| American International Law Cases.<br>(アメリカの国際法問題)  | Vol. 1-22.   | 1979      |
| Bibliographie de la philosophie. (Institut international de philosophie)<br>B) Nouvelle forme; Bulletin trimestriel. | Tom. 1-24.   | 1954-1977 |

### 中央図書館所蔵和装本の調査・整備計画

中央図書館には、約1万点を越える和装本が所蔵されており貴重な資料も多い。しかし、まだ、じゅうぶんな解説資料もない状況にあるので、1979年来これらの和装本等の解説を専門教官に依頼し、特定のテーマのもとに中央図書館メインロビーで逐次展覧している。すでに展覧の回数も10回になったが、将来はこれらの展覧解説資料を集成して、「九州大学附属図書館貴重図書等解説目録」を作成する計画である。

同時に、これら貴重な和装本の保全のため映・桐箱等の作成やマイクロ化・ハードコピー化を進めている。このほか、和装本カード目録を複製し、まず、漢籍の書誌事項等を詳細に現物調査点検した。本館所蔵の漢籍には、珠玉の「碩水文庫」等があり、特に経部・子部等にめぼしいものが多いことが明らかになった。漢籍2,050点・24,994冊中、明版(清朝・順治年間を含む)とおぼしきもの69点・976冊を発見し、ま



た先覚の注疏・書込本等も多数確認した。これらは、貴重図書に指定するとともに、マイクロ化及びハードコピー化を行い保全と活用に万全を期すことにした。

本館では、和漢混合で分類されており、「四庫分類」が採用されていないため、中国学研究者にとって不便であったが、書誌等を参照しながら調査カードに「四庫分類」を付して「九州大学中央図書館所蔵漢籍四庫分類目録稿」(約600頁)を作成し、現在校閲中である。

### 漢 籍 目 録 集 録 冊 数

|       | 経 部  |       | 史 部  |        | 子 部  |       | 集 部  |       | 叢 書 |       | 合 計   |        |
|-------|------|-------|------|--------|------|-------|------|-------|-----|-------|-------|--------|
|       | 点    | 冊     | 点    | 冊      | 点    | 冊     | 点    | 冊     | 点   | 冊     | 点     | 冊      |
| 中国漢籍  | 143  | 1,636 | 414  | 8,800  | 133  | 1,443 | 126  | 1,189 | 38  | 2,479 | 854   | 15,547 |
| 和刻刊本  | 365  | 2,161 | 176  | 2,268  | 341  | 2,519 | 198  | 1,216 | 4   | 13    | 1,084 | 8,177  |
| 朝鮮刊本  | 4    | 48    | 4    | 909    | 1    | 3     | 2    | 3     | 3   | 20    | 14    | 982    |
| 写 本   | 38   | 132   | 15   | 39     | 18   | 60    | 27   | 57    | 0   | 0     | 98    | 288    |
| (貴重書) | (29) | (266) | (10) | (152)  | (19) | (433) | (10) | (104) | (1) | (21)  | (69)  | (976)  |
| 合 計   | 550  | 3,977 | 609  | 12,015 | 493  | 4,025 | 353  | 2,465 | 45  | 2,512 | 2,050 | 24,994 |

### 図書館業務電算化ニュース

#### 北部九州地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会

〈とき：昭和56年12月7日(月) ところ：九州大学附属図書館〉

この協議会は、本地区6大学の部・課長及び事務長の出席のもとに行われ、図書館業務の電算化及びネットワークの諸問題等について討議された。そして、今後はネットワーク内のより一層の緊密な相互連絡の必要性が再認識された。

会議の主な内容は、以下の通りである。

- (1) 九大の開発状況及び今後の予定
- (2) 九州工業大学の開発方針及びその現況
- (3) 関連する昭和58年度概算要求について
- (4) 回線料等について

#### 『雑誌業務：書誌管理・機関別登録管理』説明会開催

雑誌システムの開発の進展に伴い、標記の説明会を開いた。説明要旨は次のとおりである。

書誌管理：雑誌の業務処理(受付・会計・所蔵・製本等)における書誌情報は欠かすことができないデータである。そしてこれらの書誌データは書誌変遷等に見られるように常に変化している。日常の業務処理に最新の書誌情報を提供するためには逐次書誌事項をメンテナンスしなければならない。ここでは書誌情報の維持管理に必要な一連のプログラム類及びこれらの運用についての解説を行った。

機関別登録管理：雑誌の業務処理を開始するに当たっては、当該の機関(大学・部局)はタイトル毎に次の事柄について決定をし登録をしなければならない。

- (1) “何時から開始である”, “〇〇書店に発注した”等のいわゆる取得に関する情報
- (2) 取得の後購入の場合であれば“予算コードは××××である”, “配架場所は××××である”等のいわゆる運用に関する情報

またこれらの情報は取得、運用の変更に伴い変化してゆく訳で、その都度メンテナンスしなければならない。ここでは機関別登録情報の維持管理に必要な一連のプログラム類及びこれらの運用についての解説を行った。

#### 本学教官著作寄贈図書

##### ＜医学分館＞

植木 昭和(薬学部教授)  
抗不安薬・抗うつ薬の進歩 一基礎と臨床—  
植木昭和 古川達雄共編  
医歯薬出版 昭56

##### ＜教養部分館＞

小野 和人(教養部助教授)

アメリカ文学を読む30回 小野和人等著  
太陽社 昭56

##### ＜経済学部図書室＞

都留 大治郎(経済学部教授)  
日本の食糧 川崎・黒木・藤巻編 都留大治郎等著  
恒星社厚生閣 昭56

## 利用の窓

## 共通閲覧証の発行

## — 図書館サービスの拡充 —

前号(第17巻第3号)の「利用の窓」でお知らせしました「国立大学図書館間共通閲覧システム」が、57年1月15日から実施されます。本学附属図書館長発行の「共通閲覧証」と身分証明書又は名刺を、利用したい全国各地の国立大学図書館のカウンターに提示し許可をうると、随時入館し希望の資料を閲覧できるようになりました。このシステムには国立大学の附属図書館(中央図書館等)だけでなく、分館や研究所・学部・学科の図書館・室も多数参加しています。

共通閲覧証はその年度内(1カ年間)有効ですが、申込により随時発行します。(なお、56年度の本証の有効期限は、57年3月31日までです。)この制度を利用できるのは、教職員及び大学院学生に限られています。これまでのように、利用の都度、館長が特定の相手館長あてに依頼書を発行していた制度に比べ全国の国立大学図書館が非常に利用しやすくなりました。大いに利用して下さい。

共通閲覧証は附属図書館長が発行することになっていますが、本学では利用者の便を考え、医学分館や教養部分館でも発行・交付できるようにしました。中央図書館では閲覧課相互利用掛(2453, 2463)に申入用紙を備付け、本証を発行します。(医学分館地区や教養部分館地区の利用者は、それぞれの分館に申し込んで下さい。中央図書館では二重交付等のミス防止のため交付できません。)

各国立大学の図書館(学部図書館等を含む)間相互利用(館内閲覧)マニュアルは、中央図書館のほか各分館、各学部図書室等に備え付けられています。

国立大学図書館間相互利用実施要項及び国立大学図書館間相互利用実施細則(昭和56年6月23日、第28回国立大学図書館協議会総会決定)は以下のとおりです。

## 国立大学図書館間相互利用実施要項

(昭和56.6.23第28回国立大学図書館協議会総会決定)

## 1. 目的

この要項は、国立大学に所属する研究者の研究・教育活動に資するため国立大学図書館に所蔵されている図書館資料の円滑な相互利用を促進することを目的とする。

## 2. 対象

この要項は、国立大学図書館協議会に加盟している大学図書館間における研究者による相互利用に対して適用する。

## 3. 定義

この要項における用語の定義は、次のとおりとする。

- (1) 国立大学図書館：各大学において附属図書館を構成する中央図書館、分館、部局図書館・室等をいう。
- (2) 研究者：国立大学に所属する教職員、大学院学生及びこれに準ずる者をいう。これに準ずる者は、その者が所属する大学の附属図書館長が認める者をいう。
- (3) 相互利用：研究者が他国立大学図書館に出向いて、その所蔵資料を直接利用することをいう。

## 4. 相互利用の範囲

相互利用の範囲は、館内における閲覧を原則とし、その方法は当該大学図書館の定めるところによるものとする。

## 5. 相互利用の手続

相互利用を希望する研究者は、あらかじめ所属大学の図書館長に申請し、「国立大学図書館間共通閲覧証」の交付を受け、利用時にこれを利用受入館に提示するものとする。「共通閲覧証」の様式は別に定める。

## 6. 相互利用の制限

利用受入館は、当該大学に所属する利用者の利用が著しく妨げられると判断した場合には、相互利用を制限することができる。

## 国立大学図書館間相互利用実施細則

1. この細則は、国立大学図書館間相互利用実施要項に掲げる目的を達成するために必要な事項を定めたものである。
2. 相互利用方式  
要項にいう「国立大学図書館間共通閲覧証」による共通閲覧証方式とするが、従来より実施中の他の方式を排除するものではない。
3. 国立大学図書館間共通閲覧証  
ア、様式は別紙のとおりとする。  
イ、有効期間は当該年度内とする。  
ウ、本証利用上の注意事項の周知に努める。
4. 利用受入館  
要項3の(1)にいう国立大学図書館であるが、当該大学の事情により、1大学で中央図書館のみが利用受入館となることがある。
5. 相互利用マニュアル  
各館の利用上の留意事項を盛り込んだ相互利用マニュアルを全館が所持するものとする。

### 共通閲覧証・申込書の説明

1. 希望者に発行、通用期間は当該年度内、本人に申込書・閲覧証の必要事項を記入させる。返却の要なし。
2. 館長より館長宛の正式依頼書と見做す。
3. ほかに、希望資料名を記入し事前連絡のための「資料利用依頼書」を用意しておく。利用者から直接連絡も可、その折は様式自由。これらの文書は事務連絡とみる。
4. 利用受入館では記帳を求める。

| 国立大学図書館間共通閲覧証申込書 |               |           |   |            |
|------------------|---------------|-----------|---|------------|
| 部局               | 学科<br>専攻      | 職名<br>D C | 年 | ふりがな<br>氏名 |
| 申込日              | 昭和 年 月 日 ※No. |           |   |            |
| 現住所              | (〒) 方 Tel.    |           |   |            |
| 備考               | 学内連絡先 Tel.    |           |   |            |

注意 ※印欄は記入しないで下さい。 附属図書館

国立大学図書館間  
共通閲覧証

※ No. \_\_\_\_\_  
昭和 年 月 日

国立大学図書館協議会  
加盟館長殿  
附属図書館長印

所属 \_\_\_\_\_  
身分 \_\_\_\_\_  
氏名 \_\_\_\_\_

本学の上記の者から、貴館資料を利用したい旨、申し出がありましたので、閲覧の便宜をお取り計らい下さるようお願いいたします。

〔有効期間：昭和 年 3月31日まで〕

### 中央図書館語学テープの案内

中央図書館3階L・Lブースでの語学学習のため、下記外国語学習テープを閲覧掛事務室に備えています。新しいテープも逐次追加しております。積極的に利用されるよう案内します。

なお、留学生等外国人のための「日本語学習テープ」も用意しています。「英語解説の日本語テープ」があることを留学生諸君に教えてくださるようお願いいたします。

#### 語 学 教 材 リ ス ト

##### American

Linguaphone  
American English Course  
American English Standard Course  
American English Intermediate Course

##### Advanced American English Course

Cassette Tapes  
アメリカ口語教本 (入門・初・中・上級)

##### English

Linguaphone

English Course  
TEC Labo  
基本英語会話  
上級英会話  
ビジネスのために  
日常社交のために  
海外旅行のために  
Cassette Tapes  
英語検定 1～4級  
英語会話60日  
海外旅行の英会話  
日本を紹介する英会話  
名作シナリオシリーズ  
ジェーン・エア  
嵐が丘  
チップス先生さようなら  
80日間世界一周  
黒猫  
おとし穴と振り子  
誰がために鐘は鳴る  
二都物語  
人間の絆  
白鯨  
緋文字  
武器よさらば  
息子と老人  
怒りのブドウ  
アメリカの悲劇  
すばらしい新世界  
経済英語の構文  
写真とテープによる化学英語シリーズ  
工業技術英語入門  
Reading and Conversation  
English Communication Practices  
A First Step to English Conversation  
Modern English an Oral Approach  
Take a Break, English for Travel  
Germany  
Linguaphone  
Deutscher Kursus  
TEC Labo  
ドイツ語入門  
Cassette Tapes

Deutsch als Fremdsprache (Grundkurs, Aufbaukurs,  
Ergänzungskurs)  
Deutscher Liederschatz  
French  
Linguaphone  
Cours de français  
TEC Labo  
フランス語入門  
Cassette Tapes  
入門フランス語  
Le français en trois semaines  
Italian  
Linguaphone  
Corso d'italiano  
Spanish  
Linguaphone  
Curso de Español  
TEC Labo  
スペイン語会話  
Russian  
Linguaphone  
Курс Русского Языка  
TEC Labo  
ロシア語入門  
Cassette Tapes  
ロシア語教科書 (初・中級)  
Chinese  
Liguaphone  
Chinese Course  
TEC Labo  
中国語入門  
Cassette Tapes  
L・L中国語 (初・中・上級)  
現代中国語 応用編  
Korean  
Cassette Tapes  
標準韓国語会話  
Japanese  
TEC Labo  
基礎日本語  
Cassette Tapes  
Practical Japanese Basic Course  
Intensive Course in Japanese  
方言談話資料

## JOIS に新しく追加されたファイルについて

JICST (科学技術情報センター) が提供しているオンラインサービス JOIS に新しいファイルが10月から11月にかけて追加されたことは既に本誌17巻3号でお知らせした通りです。

今回は「JOIS利用ガイド」の補足分として追加ファイルの説明をします。

なお、人文・社会科学分野をも含めた大型情報検索システムのロッキード/DIALOGサービスは昭和57年度から導入する予定です。

### BIOSIS ファイル

製 作: Bio Sciences Information Service

対象分野: 生物学 ライフサイエンス

収録期間: 1979年1月～現在

収録件数: 約30万件/年

収録対象: 主要100余カ国の学術雑誌約9,000種, レポート, 会議資料等

対 応 誌: Biological Abstracts, BA/Reports, Reviews, Meeting

## 1 次 検 索 キ ー

| キ ー 名   | コード | 内 容   |
|---------|-----|---|
| キーワード   | KW  | 概念見出語 <sup>(1)</sup> , 生物分類見出語 <sup>(2)</sup>     |
| フリーターム  | FT  | 標題からの抽出語 <sup>(3)</sup> , ディスクリプター <sup>(4)</sup> |
| 分類コード   | CC  | 概念コード <sup>(5)</sup> , 生物分類コード <sup>(6)</sup>     |
| 著 者 名   | AU  | 1 論文につき10名まで                                      |
| 所 属 機 関 | AA  | 省略形で入力されている                                       |
| 資 料 番 号 | JN  | CODEN   |

- (1) 概念見出語 (Concept Heading) : 索引作成者が付与した, 文献の主題を表わす語句で, 現在約570個用意されており, 1 文献当り10個程度与えられる。
- (2) 生物分類見出語 (Biosystematic Heading) : 索引作成者が付与した, 文献の取扱う生物を表わす語句で, 主として科・目・綱名から成り現在約1,000個用意されている。なお, 属名・種名より成る具体的学名・俗名はフリーターム中に含まれている。
- (3) BIOSIS では著者が付けた論文標題に若干の修正を加えている。それは米国式綴字法への統一, 標準的略語の使用, 合成語の分ち書き等である。「BIOSIS Search Guide」のマスターインデックスで確認する必要がある。
- (4) ディスクリプター (Descriptor) : 標題中ない語句で, 文献内容を補足し検索に役立つように索引者が付与したもので, 生物名, 酵素番号, 薬品名等がある。
- (5)(6)はそれぞれ(1)及び(2)に対応するコード番号である。

なお, BIOSIS の原ファイル (BIOSIS Previews) 中には, 概念見出語, 生物分類見出語は入っておらず, JICST が検索の便に供するために付け加えたものである。

## 〈検索補助資料〉

BIOSIS Search Guide

## CAB ファイル

製 作 : Commonwealth Agricultural Bureaux

対象分野 : 農業, 農学

収録期間 : 1979年1月~現在

収録件数 : 約15万件/年

収録対象 : 主要43カ国の雑誌8,500種, 単行本, レポート, 会議資料等

対 応 誌 : CAB 発行の抄録誌56種

## 1 次 検 索 キ ー

| キ ー 名   | コード | 内 容                      |
|---------|-----|--------------------------|
| キーワード   | KW  | CAB の各抄録誌の主題索引語及び国名, 地域名 |
| フリーターム  | FT  | 標題からの抽出語及びその他の索引語        |
| 分類コード   | CC  |                          |
| 著 者 名   | AU  |                          |
| 団体著者名   | AA  |                          |
| 資 料 番 号 | JN  | ISBN, SBN 逐次刊行物にはなし      |
| 記 事 番 号 | CN  | 部分ファイルコードと巻数からなる         |

## 〈検索補助資料〉

CAB Abstracts Online

CAB Abstracts Word List

## JICST 国内医学文献ファイル

製 作 : 日本科学情報センター, 医学中央雑誌刊行会

対象分野 : 医学, 薬学, ライフサイエンス

収録期間 : 1981年4月~現在

収録件数 : 約3万件/年

収録対象 : 日本の主要医学雑誌303誌

対 応 誌：医学中央雑誌，科学技術文献速報ライフサイエンス編

1次検索キーの種類及び内容は JICST ファイルに同じ

(閲覧課参考調査掛)

## ◆ 研 修

### 昭和56年度 大学図書館講習会に参加して

<とき：昭和56年11月17日～20日 ところ：大阪大学附属図書館吹田分館>

この講習会は毎年「大学図書館活動を促進するため，大学図書館の職員に図書館業務の最新の知識及び専門的技術を習得させその資質向上を図る」ことを目的としておこなわれている。

今回の講習会も昨年に引き続き，文部省学術国際局情報図書館課から出されている「これからの学術情報流通の在り方」をメインテーマとし，図書館行政，海外における図書館情報サービスの現状，大型電算機センターの情報検索システム，及び学術情報システムにおける大学図書館の役割，等々について講義があり，現在進められつつある学術情報ネットワーク構想の具体化が更に一歩進んだものとして感じられる講習会であった。

学術情報センターは旧一橋講堂跡に昭和59年に設立されることに決定しており，地域センターとして，名古屋大学及び本学の機械化の現状等も紹介された。

講義の中の一つである「学術情報システムに関する研究開発 —化合物辞書のデータベース—」について簡単に紹介したい。

化合物には，同一物質でも沢山の名前がある。例えばポリエチレンは，約120個，アスピリンは，約80個の異名を持っている。このような異名をある特定のものに同定するためには，辞書が必要となる。又，現在わかっている化合物は，550万種あり，人が5秒で1つを認識するとしても単純計算で318日かかる。この化合物の辞書について，出現頻度の高いものを，化合物登録番号，物質名及び構造式などからいろいろな検索，例えば全構造でなく部分構造からすでに知られているかという探し方をコンピュータで処理できるようにするという研究開発の目的を言われた。学術情報システムが完成したとき，ある物質に関するの輸出入の統計とか，世界での生産量，製法，医薬効果などの情報入手に辞書ファイルで化合物登録番号を教えてもらって，個々のデータベースを検索し，必要な文献情報を入手することができる。

学術情報システムが整備されれば，学術情報センターを中枢機能とし，大型計算機センター等の2次情報提供システムと，大学図書館等の役割である体系的・網羅的に収集された1次情報の目録情報や所在情報とその一次情報提供等有機的につながることになると思われる。今年10月1日からは，7大型計算機センター間のネットワークサービスが，また来年1月15日からは，国立大学図書館間相互利用(館内閲覧)がスタートするがこれらはその具体化の第一歩と見ることができよう。

受講者 農学部図書掛 深川 光郎  
理学部図書掛 三浦 誠

## ◆ 会 議

### 第52回 日本医学図書館協会総会

<とき：昭和56年10月27日(火)～10月28日(水) ところ：日本医科大学>

本年度は日本医科大学の当番の下に加盟館(準会員を含む)98館が参加し，次の承合事項及び議題について協議が行われた。

承 合 事 項

1. 一般教養図書・雑誌の収集、整理について（東京女子医科大学）
2. 貴館の医学情報センターとしての地域社会との結びつきについて制度的、組織的結びつきを図っているか（横浜市立大学）

#### 協議題

1. 情報検索・相互貸借要員の確保について（北海道区）
2. 国立国会図書館への医学書納本の促進について（中央事務局）
3. 第5回国際医学図書館員会議の日本開催要請について（中央事務局）
4. 正会員入会加盟について（中央事務局）
5. 準会員退会について（中央事務局）
6. 次期当番館について（中央事務局）

なお、当分館から西嶋受入掛長、河上目録掛長が出席した。

### お知らせ

## 保存図書館の利用停止について

### — 中央図書館 —

改修工事のため下記期間、保存図書館に収蔵されている保存図書の閲覧・貸出及び複写業務を停止しますので、お知らせします。

#### 記

停止期間：56年12月14日(月)～57年2月27日(土)

## 休館のお知らせ

### — 医学分館 —

このたび医学分館の新営工事が完了いたしました。

つきましては、利用者の皆様方大変御迷惑をおかけしますが、新館へ移転のため下記の期間中休館いたしますので、お知らせします。

#### 記

昭和56年12月14日(月)～昭和57年2月4日(木)

### ◆ 日 録（昭和56年10月～12月）

#### 会 議 等

- |   |   |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>10. 29 常務理事会(56年度第1回) 於京都大学</li> <li>30 国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会・<br/>図書館協議会理事会 於京都大学</li> <li>11. 10 図書系掛長会議・同研修会</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>11. 16 図書館体系検討委員会（第3回）</li> <li>24 昭和56年度福岡県佐賀県大学図書館協議会<br/>第2回福岡地区研究会 於私立共済会館</li> <li>12. 7 北部九州地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会</li> </ol> |
|---|---|